

学校教師にできる不登校支援

—— 不登校中核群への対応を中心に ——

大石 英史

Support Manual for School Teachers about the Core Type of School Refusal

OISHI Eiji

(Received January 10, 2006)

キーワード：学校教師、不登校中核群、支援マニュアル

I. 不登校中核群とは？

不登校とは、児童生徒が学校に行かなくなった状態を示す言葉であり、その中には様々なタイプの子どもたちが含まれている。ただし、不登校は、その言葉が示す通り、学校という場所からの退却を意味しており、学校を舞台として生起する現象である。それは、言い方を換えれば、学校が担ってきた「文化」への不適応を意味している。

本稿の目的は、不登校の中でもその中心を占めている神経症的な不登校を対象を絞り、学校教師の立場から不登校児童生徒への支援をより円滑に行っていくための対応上のポイントを、いくつかの主要項目を掲げながらできるだけ支援マニュアル的に提示することである。それにより、学校教師たちが、その役割と責任を再認識し、他教員や他機関とも協力し合いながら、不登校に対するより効果的な支援を行えることをねらいとするものである。小泉(1988)は、当時、病気や経済的理由によるものまで含めた「広義の登校拒否」のうち、統計上約7割を神経症的登校拒否が占めていることを示し、これを「狭義の登校拒否」として位置づけ、その中に、分離不安型、甘やかされ型、優等生の息切れ型の3者が含まれていることを指摘している。ただし、不登校も時代や社会の変化とともに、少しずつその様相を変えてきている。

本稿では、小泉が指摘した「狭義の登校拒否」を「不登校中核群」として位置づけ、これを「学校に行きたいけど行けない子、あるいは学校に行かなければならないとわかっていても行けない子たちの総称であり、学校へと気持ちが向かないことの背景に、学校文化への不適応ないしは神経症的な不安を有する不登校児童生徒のこと」であると定義し、これらの子どもたちを対象にした学校での支援について述べることにする。したがって、以下Ⅱに示すように、いじめ、軽度発達障害、養育環境上の問題、精神疾患を主な背景とする不登校については、むしろ特別な配慮を要する例外的な不登校と位置づけ、その理解と対応については、それぞれ稿を改めて論じる必要があると考える。

Ⅱ. かかわりをはじめ前の確認事項

不登校の子どもへとアプローチしていく際に、以下、(1)～(4)の4つの項目があてはまる場合には、その背景に基づいた特別な配慮をもって早めの対応を行っていくことが必要である。

(1) いじめがきっかけになっている場合

この場合、本人がいじめであると感じた出来事を広義のいじめとして捉え、本人の訴えに耳を傾けつつサポートを行っていくことが対応の基本である。筆者は、このような対応を日常の学校生活におけるすべての子どもたちに向けられた教育援助であると捉え、それを実践する教師の姿勢の中に不登校の未然防止に関する重要な要素が含まれていると考えている。したがって、いじめの事実関係を事細かに聴取していくことが、その主な目的ではなく、あくまでもいじめられたと訴える子どもの思いを受けとめ、どうすればよいのかを共に考え、そのプロセスの中で、いじめた側への介入が必要であると判断された場合には毅然とした態度で指導していく。

不登校のきっかけについて本人に聴取することの目的は、「学校に行くことに関して何がこの子の心を重くしているのか？」について、教師が子どもと共に考えていくことによって子どもの理解と対応を推し進めていくことである。その躓きに耳を傾け、可能な範囲で環境的な配慮を行い、できるだけ一過性のものとして通過させていく。なお、深刻かつ陰湿ないじめがきっかけになっている場合は、早期に教師間で話し合いを行い、事実関係を確認したうえで、その対応について協議する。その際、いじめられた子のケアと同時にいじめた子への介入、指導、ケアを行っていく。特に程度がひどいと判断される場合には、事実関係を確認したうえで双方の保護者を呼び出し、謝罪を行える場を設けるなど、被害を受けた子とその保護者の心情を理解しつつ丁寧な対応を行っていかなければならない。

いずれの場合にも、学級担任ひとりが抱え込むことなく、他教員や専門家等の助けを借りられるときは借りるということが対応の基本姿勢である。なお、対応上の基本理念については、文献「解決しよう!! 子どものいじめ」(2005)を参照されたい。

(2) 軽度発達障害が認められる場合

不登校の背景に軽度発達障害、特に高機能自閉症やアスペルガー症候群などの高機能汎性発達障害の可能性が考えられる場合には、専門家と連携を取りながら、本人のどのような特性が不登校とつながったのかを慎重に見極めたうえで、本人とかかわりの持てる教師がキーパーソンとなって、無理のない教育環境を再度用意していくことが必要である。特に、いじめやからかいが絡んでいる場合には、「いじめられるこの子にも問題がある」として済ませるのではなく、まずは本人が感じた世界に共感的に耳を傾けたのちに、指導が必要な場合には、わかりやすく丁寧にかかわっていくことが求められる。

(3) 養育環境上の問題がある場合

保護者のあり方が子どもの基本的な生活習慣の確立を著しく妨げている場合や養育的関与そのものが乏しい場合、あるいは軽度のネグレクトを含めた虐待が不登校の背景の中心的な問題と考えられる場合には、地域の人材や関係機関とも連携を取り、早期の介入を行っていく。ただし、母親を悪者扱いすることで、保護者との関係が途切れてしまうことが多いので、母親を追い詰めることなく勇気づけ、できることからはじめていく教師との信頼

関係づくりを第一に考えながら動いていくことがポイントとなる。

(4) 精神疾患の疑いがある場合

小児あるいは思春期のうつ病、思春期以降における統合失調症の初期症状など、精神疾患の可能性が疑われるときは、その状況を保護者に伝えながら専門家へとつなげていく。特に、学校での状況を伝えるときには、スクールカウンセラーなど学校内の専門家にも仲介を依頼し、保護者が納得できるような場を設定するとともに、適切な医療機関などを紹介する。

以上、(1)～(4)の確認作業と同時に、教員は、以下の項目(5)と(6)にも留意し、本人の家族に関する情報を得ながら、不登校が生じてきた背景の理解を進めていく。

(5) 思春期の手前か後か？

思春期手前であれば乳幼児期からの家庭環境の影響による不登校、家庭の文化と教室の文化のギャップに起因する不登校などが考えられる。思春期以降の場合であれば、仲間関係におけるトラブル、教師との関係におけるトラブルがきっかけとなっている不登校が中心となる。なお、それぞれの対応についてはⅣに示す。

(6) はじめての不登校かどうか？

不登校には習慣性がある。小学校が始まってからの出席に関する情報を可能な範囲で収集し、はじめての場合は「初発対応」として介入する。なお、「初発対応」の重要性については、文献(大石,2005)を参照されたい。

特に、項目(2)と(4)については、その判断に際して専門的な知識が必要となる場合が多く、スクールカウンセラーなどの協力を得ることが必要である。ただし、項目(1)と(6)は学校での情報収集により、教師が判断していかなければならないものである。以上、(1)～(6)の確認作業を経て、不登校中核群へと対象を絞り込んでいく。

Ⅲ. 不登校が辿る一般的経過

不登校が一般的にどのような経過を辿っていくのかを知っておくことで、かかわろうとするその時点における状況理解を、それまでの時間的経過を視野に入れた形で把握することができる。とりわけ不登校中核群である神経症的な不登校が辿る経過は、一般的に次の通りである。

- (1) 前駆的症候期…身体症状などが出て、登校をしぶり始める時期。学校に行かなければならないという気持ちが崩れつつある状態。「どうすればいいのか?」「どうしたいのか?」自分の気持ちがわからなくなる、あるいはわからない状態の時期。
- (2) 初期動揺期…欠席の日が増え始め、家族の動揺が激しい時期。学校に行きたくない気持ちがはっきり出ている状態の時期。
- (3) 家庭内安定期…親子関係は安定し、家でゆっくり過ごしている時期。ただし、学校に行かない代わりに何をすればいいのかわからない状態の時期。
- (4) 再始動期…家にいることに退屈し、外の世界に関心が向き始める時期。学校の話題に対しても抵抗を示さなくなる。自分の部屋を片付けたり、髪を切りに行ったり、自発的な行動が見られ始める。きっかけを提供されれば、「この行事には参加して

みたい」「これくらいの勉強ならやれそう」「実際やってみたら何とかやれた」など具体的に動ける可能性が高くなる時期。

上記の時期を考慮すれば、不登校予防とは、(1)の状態にならないための教育支援であり、不登校支援とは、(2)と(3)の状態を行き来しながら、(4)の状態にもっていくための教育支援のことである。このプロセスが本人にとって自己の建て直しの意味を持っていることが中核群の特徴であり、基本的には、(4)の時期に至るまでは、働きかけることと待つことのバランスを図りながら、長いスパンの中での回復と成長を根気よく見守っていく。重要なことは、身近にいる者が、本人の自発的な動きの発露に対して、タイミングよく手を貸せることである。

Ⅳ. 思春期の前後におけるアプローチの違い

(1) 思春期以前の不登校

思春期以前、特に小学校低中学年からはじまる不登校の場合は、保護者との信頼関係づくりが対応の基本である。まずは、登校習慣の確立、小学校環境への適応を容易にするために、学級担任は幼稚園や保育園での情報を収集するとともに、保護者との信頼関係づくりを行っていく。保護者が子どもを安心して学校に送り出せるよう、学級担任は保護者の学校に対する不安に耳を傾け、できる範囲での環境的配慮を行う。ケースによっては、一時的に教師が朝迎えに行き、登校を促すことが有効なこともある。また、朝は登校をしぶるが、いったん学校に来たら明るく元気に過ごせる。しかし、次の日になるとまた来なくなることの繰り返しとなるケースもある。そのような場合には、学校での迎え方に問題がないかを振り返ると共に、登校しぶりの背景にある親子関係の問題にも目を向けていく。学校に来させることだけに力を注ぐのではなく、その背景にどのような問題が潜んでいるのかを把握し、理解しつつ対応していくことが必要である。仮に、教師が心を鬼にして行かせようとしたとしても、目に見える結果が得られないときには、その熱心さはやがて親を問題視し、責めてしまうことになりやすい。

重要なことは、原因を家族の中に求め、母親を原因に仕立て上げていくことではなく、むしろ母親の労をねぎらい、「それぞれの立場で、子どものためにできることをやってみましょう」と元気づけることである。それによって、母親がこれまでの子育てを振り返り、子どもに寄り添いつつもしっかりと学校に向けて押し出せるように、母親をサポートすることである。特に、母子分離不安傾向のある不登校の場合は、母親が安定感をもって子どもを学校に向けて押し出せるようになることで、子ども自身が安心して母親から離れられるようになることがある。日々の家庭生活の中に、子どもにとって母親がしっかりとそばにいてくれることを実感させる時間と空間が存在するようになっていくことを支援していく。場合によっては、子ども自身が気持ちを解放できるように、専門機関でプレイセラピーを行うこともあるだろう。いずれにせよ、言葉以前の実体験を通して心の回復を図っていくことが、この時期の子どもたちの成長にとって必要な支援である。

(2) 思春期以降の不登校

思春期以降の不登校にかかわるときに重要なことは、本人の「成長への欲求」が何を欲しているのかを、時間をかけながら、できるだけ本人の言葉で表現できるように支援していくことである。別の言い方をすれば、不登校の状況の中に本人の成長への願いを見出し

ていく作業が必要である。そのためには、まず、本人がどのような経緯で不登校になったのかに関するストーリーを十分描けるように情報を収集する。それをもとに、「この子がどうなっていくことが不登校経験をプラスに生かしたことになるのか？」について想像してみる。可能であれば、「何をしてほしいのか?」、「どうしてほしいのか?」「どうしたいのか?」を直接本人に聞いてみる。そして、それらのことに耳を傾けつつも、「学校に行くか行かないかは自分の人生の問題である。しかし、今の時期にあなたが将来への十分な見通しを持って判断することは難しいと思う」、「できれば私なりの経験から助言させてほしい。もちろんそれを受け入れるかどうかは最終的にはあなたが決めることだが…」などのまえおきをしながら、教師の思いを丁寧に伝える。そして、できるだけ具体的な情報や提案を添えながら根気よく問いかけていく。問いを投げかけては待つことを繰り返していくのである。その中で、本人がやれそうだと思うことを見つけ、その都度行動に移せるような手助けをしていく。自分の気持ちからやりたいと思うことをしっかりやらせてやること。教師や保護者にとっての望ましい形よりも、本人がやろうとする気持ちを尊重することが基本である。

また、家族でも学校関係者でもない他者によるサポートを同時に行っていくことが、子どもの成長の幅を広げてくれることもある。大学生によるメンタル・フレンドや家庭教師カウンセラーによるサポートなどがこれにあたる。これらのかかわりは、不登校の質の向上を図り、それによって現実復帰への第一歩を踏み出すために必要なステップとなる。いずれにせよ、本人が信頼を寄せる他者との話し合いの中で、不登校という生き方は案外厳しい選択であることや「自分の気持ち」にこだわることはかえって自分を不自由にすることがあるなどの内省が深まり、葛藤を抱えられるようになることが、思春期以降の不登校支援が目指す方向性である。

V. 不登校の初期対応

不登校の初期対応は、学校教師が関与できる領域の中で、その後の状況を左右する最も重要なもののひとつである。初期対応は、学校教師だけが立ち会える重要な時期とかがわりの領域を含んでいるからである。そして、子どもにとってはじめての不登校の場合は、「初発対応」として充分留意しつつかかわっていくことが求められる（文献：大石，2005参照）。

(1) 本人に対して

登校しぶりの理由について、まず教師自身が思い当たることを想像しながら家庭訪問を行う。可能であれば、「どうしたのか?」「何があったのか?」「よかったら話してほしい」などと丁寧に問いかけ、事情を聞いてみる。理由があれば、それについて話を聞き、少しでも本人が過ごしやすい学校生活へのサポートを、登校を続けながら行っていきたいことを伝える。話したくないようであれば、それ以上の聞き取りは控える。本人との間にある程度の信頼関係があり、初期の状態がさほど緊迫していないようであれば、「これからどうしたいと思っているのか?」を尋ねることで、不登校への自覚性に関する確認を行ってみる。特に理由もなくかつ元気そうであれば、「明日は必ず学校においでよ。どうすればいいか一緒に考えてみよう」と誘ってみる。学級担任に具体的なアイデアや提案があれば伝え、それについてどう思うかなども尋ねてみる。特に、小学校低学年であれば、尋ねつつ「とりあえず学校においでよ」という主旨の話をしてみる。

(2) 保護者に対して

最近の家での様子や気になっていることがないかを尋ねてみる。また、きっかけとなっている出来事があれば、それに対してどう思っているかを聞く。学級経営に関して保護者が不安に思っていることがあればそれを受けとめる。保護者が安心して子どもを押し出せるように配慮していく。保護者の中に教育に関する特定の方向性などがあれば、そのことについても聞き取りを行い、保護者としては具体的にどうしたいと思っているかを尋ねてみる。その際、教師は保護者の考えに耳を傾けつつ、学校が目指していることや教師個人の考えを伝え、当面学校や担任にできることは何かについて検討していく。

(3) クラスに対して

学級担任は、本人の了解を得たうえで、クラスの仲間に対して、引き金となる出来事がなかったかどうか事実確認を行い、あればそれについて指導する。場合によっては、「今までその子にどう接してきたか?」「実際にどんなことがあったのか?」「どうすればよいと思うか?」などを話し合い、みんなにできること、先生にできることを話し合い、実行できることはひとりひとりが実行していく。今後、本人が登校してきたときには、興味本位な質問や追い詰めるような言動を控えるように指導しておく。これらのクラスづくりを通して、本人が戻りやすい環境を用意する。

(4) 母子分離不安が見られる場合

対応のポイントは、学級担任が母親との信頼関係をつくることである。まず一緒に学校に来てもらうことから始める。そして、母親の気持ちを十分汲み取ったうえで、母子分離へ向けての話し合い、具体的には、「お母さんがちゃんと待っていてくれるから学校で頑張ってくる」という方向に向けての支援を少しずつ進めていく。「行きたくない」と言っても、母親は動揺せず、一応は登校準備をさせ、学校に連れてくるようにする。当面は学校に母親の居場所を用意し、本人が徐々に母親から離れていけるようにしていく。場合によっては、朝教師が迎えに行く。仲のよい友人がいれば誘い合わせて一緒に家庭訪問を行い、本人の反応を見る。強く拒否するようであれば、保護者との話し合いは続けながら、しばらく様子を見る。例えば、その日の様子を手紙等で知らせる。他の生徒の自発的動きがあれば、メッセージを届けるなどの方法も工夫する。

(5) スクールカウンセラーを活用した初期介入事例

以下は、学級担任が教育相談担当教員を介してスクールカウンセラーに依頼した、登校しぶり段階（前駆的症状期）にある女子生徒への支援事例である。

本人の状況：中1の2学期より、自己臭恐怖による登校しぶりが始まる。本人によれば、「授業中おならが出る。それが臭うのが気になる。それをからかう男子生徒もいる。大切にしていた友人からは『気のせいよ』と一方的に言われ傷ついた。」内科胃腸科で検査を受けたが異常なし。一応腸にガスがたまらない薬をもらうがあまり効かない。その結果、3学期から不登校気味になっている。

面接：1年3学期1月末、母親と本人と一緒に教育相談室を訪れる。まず本人の身体症状について尋ね、続いて、「今どんなことに困っているか?」を聞いてみる。同席した母親

からも、本人の置かれている状況や不安を聞いていく。その後、スクールカウンセラーは次のような助言を行った。

助言：「まずあなたの腸の状態についてお医者さんにちゃんと診てもらおうよ。本当にガスがたまりやすい原因が見つければ、ガスがたまらない薬をもらって飲もう。ただ、どっちにしてもおならのことが気になって学校に行けなくなるのはもったいないと思うよ。あなたも言うように、この症状さえなかったら何の問題もなく学校に行けるのだから…。大事なことは、仮にその症状が出ても少しでも安心して過ごせる工夫と対策を考えてみることにゃないかな。例えば、授業の前の休み時間には必ずトイレに行っておくとか、我慢しても漏れてしまったときは知らないふりをしておくとか。後は、あなたの気持ち次第だと思うよ。」

……僕たちが今日こうやって出会えたのも、きみが相談室に行ってみようと思って立ち上がったからじゃないのかな。例えば、同じ学校を休んだとしても『あまた休んでしまった』というのと『今の自分は心を休めることが必要。だから休む。でも大切な一日にしよう』と思って過ごすのでは大きな違いがあるよね。その一日一日が積み重なっていくのだから1ヶ月とか半年とかで大きな違いが出てくる。気になりながら何となく流されていく毎日ではなくて、何か自分から少しでもできることをやっていくと人間は元気になれると思うよ。」

その日の午後、担任に誘われ教室に入って午後の授業を受ける。その翌日から続けて教室に登校するようになった。その後も、元気に登校しているということだったので、面接はこの1回のみで終了となった。

この面接でスクールカウンセラーが心掛けたことは以下のとおりである。

- ①まず本人の訴えを心の問題に結びつける前に身体の問題として丁寧に聞く。
- ②その後で本人が何を不安に思っているのかを具体的に聞く。
- ③できそうな工夫について具体的に提案してみる。
- ④本人の中にある「本当は教室に入りたい」という気持ちを捉える。
- ⑤症状をことさら排除するのではなく、症状と気楽に付き合っていくことができる自分になれるようにもっていく。

これらのことは、そのまま学校教師にも行えるかわりである。

Ⅵ. 長期化した不登校への支援

(1) ひきこもり型不登校への支援

すぐに学校に復帰させるように働きかけることは得策ではない。まずは、子どもと親の双方に対して、信頼してもらえる人になるための時間が必要である。子どもや親から見て、「この先生なら大丈夫かもしれない」と思ってもらえること。そのために、援助者の関心は、本人をいかにして学校に来させるかではなく、本人と家族の気持ちに向けられなければならない。例えば、本人が今どんなことに興味関心を持っているのかに関心を寄せ、その関心物を間に挟んで会話をしていく。ラポール形成のために、交換日記等によるコミュニケーションチャンネルを用意するとうまくいくこともある。

一方、保護者に対しては、これまでの経過、すなわち、本人の状態の経過、学校からの支援の経過とその評価（何がよかったか、よくなかったか）について尋ねてみる。そして、学校に対する親としての現時点での要望、希望を聞く。「やれることからやっていきましょ

う」「何かあったらどんなことでも言ってください」などの言葉を添えて帰るようにする。本人が、自分のことを話してくれるようになったら、学校の情報などを伝え、行事などに誘ってみる。タイミングを見計らって、本人とのかかわりをクラスにフィードバックしたり、クラスの仲間からのメッセージを本人に届けてみる。学校に行けそうであれば、学校にきたときの受け皿としてどのような形が可能なのか、それと本人の要望とを重ね合わせながら具体的に話し合う。例えば、保健室がいいのか、相談室がいいのか、直接教室がいいのか、授業にはどれくらい出たいと思うか、などについて学校の状況を伝えながら、丁寧に確認していく。大まかな方向が決まったら、あとは行動を起こしてから考えるように誘う。

また、回復期において、家族でも教師でもない学生などが、家庭教師カウンセラーとして家庭訪問を行い、勉強を教えたり、一緒に外出してくれたりすることが現実復帰への重要な第一歩となることも多い。そのような連携を必要に応じて導入できるようなシステムを学校にも準備できるとよい。

(2) 別室登校の子どもへの支援

まず、本人を受け入れるための学校での居場所として、保健室や相談室があることを伝える。そこに通ってみる気はないか誘ってみる。本人が了解すれば、「いつから始めるか?」、「そこで何をして過ごしたいか?」などを教師と話し合い、教師の方で何かよい提案があれば、それを伝えてみる。保健室や相談室に来はじめたら、まずそこで安心して過ごせていることを確かめる。次に、教室に戻る意思について話し合う。例えば、「今学期中には教室に戻る」という目標を定めたりする。随時、家庭訪問や電話連絡を行い、保護者に別室での本人の様子を伝えるとともに、本人の家での様子も聞く。保護者からの要望があればしっかり聞く。本人が相談室にいるとき、かかわりのある教師は、担任だけでなく、できるだけ本人と顔を合わせるように努める。時期を見て、出られる授業には行くように誘ってみる。本人用の個別の時間割を作り、今後の目標などをわかりやすく部屋の壁に貼ったりする。仲間が休み時間に話をしに来ることも、本人が許容できる範囲で促していく。

Ⅶ. 不登校へのタイプ別アプローチ

不登校のタイプには様々なものがあるが、その中心に不登校中核群を置いて理解することでより効果的な支援が可能となる。ここでは、中核群である神経症的不登校をさらに4つのサブタイプに分け、それぞれの対応上のポイントを示す。

(1) よい子の息切れタイプ

特徴：学校で頑張り過ぎて疲れる。自分が出せない。言い返せない。重たがられるから友達には悩みを話せない。心配かけるから親にも話したがらない。親の期待を強く受けて育った子が思春期ないしはその手前で息切れする。

対応：登校刺激を控え、教室復帰よりも信頼関係づくりに重点を置いてかかわっていく。気分転換を図れるよう気持ちを軽くしてやる。ある程度の信頼関係が築けたら話を聞いてみる。継続的な面接が可能なら学校のことや親のことや自分の内面を少し距離を置いて眺め語れるように誘っていく。無理をせずできることからはじめればよいと助言し、少しずつ自己調節していけるように導く。「来たいときに来たらいいよ。いつでも待っとくから」と気持ちを緩めてやる。保護者に対しては、これまでの子どもへのかかわり方を見直し、

子どもの気持ちに目が向くようにサポートしていく。

(2) 対人恐怖タイプ

特徴：いったん学校を休むことで、対人恐怖的心性が高じ、教室にいられなくなる子。同じ学校、同学年、同じクラスの生徒となるほど会うことを避ける。

対応：学校の中に他者の目を気にしなくてすむ居場所をつくってやる。無理やり人とかかわらせるのではなく、そっとさりげなく迎えてやる。

(1)と(2)のタイプは、従来から不登校中核群として位置付けられており、強めの登校刺激を控え、本人の自主性を尊重しながら時間をかけてかかわっていくことが原則である。その中で、本人は徐々に回復し自発的な行動を起こしはじめる。しかし、近年増加してきていると考えられるのが、以下に示す神経症周辺群にありながら自己愛傾向の強い不登校の子どもたちである。

(3) 甘やかされタイプ

特徴：保護者は不登校当初より、子どもが学校に行かないことをどこかで容認している。保護者は子どもを鍛えるという観点に乏しく、困難に対して過度に心配し、先回りして手を貸してしまいがちである。子どもは、いたってマイペースであり、少し慣れてくると援助者に対して傍若無人に振る舞うこともある。小学校低学年時より欠席が目立つことが多い。

対応：学級担任が保護者の信頼を得ることがポイントとなる。「親はあっさり子どもを押し出し、学校は子どもを丁寧に迎える」という関係を作っていく。保護者と学校の教育方針の足並みがそろうことが大事であり、保護者の問題点を指摘していくことよりも、できることを一緒に考えていくことを重視する。保護者の信頼が得られれば、基本的な生活習慣づくりや本人にやるべきことはやらせるようにしむける働きかけを行っていく。仲間関係をめぐるトラブルに対しては、本人の言い分を十分認めながらも、より適切なかかわり方を教えるようにする。時機を待って、その子のペースを大切にされたかかわりから、保護者と教師が中心となり、より望ましい生活の形へと誘っていく。本人に対していくつかの具体的な提案を行い、どれがいいかを一緒に考えながら本人に選ばせ実行させていく。

(4) 無気力タイプ

特徴：誘えば登校するがまたしばらくすると来なくなる。何事に対しても積極性に乏しく、学習意欲にも乏しいので、学力的にもついていけなくなる。保護者は気になりながらも、どうかわればよいのかわからずにいる。

対応：対応の基本は(3)と同じである。教師は本人に対して積極的に働きかけを行う。学校の中に本人が望んでいる役割を与え、登校習慣の確立を目指す。保護者との信頼関係を築き、教師からの働きかけを協力的に見守ってもらえるようにする。学校での受け皿を用意し、学習面でのサポートも行っていく。

ただし、(1)と(2)の神経症的背景を持つ不登校の子たちにおいても、回復過程の中で一見わがままや無気力と思われる状態を示す時期がある。初期動揺期や家庭内安定期と呼ばれる時期には、このような傾向がしばしば見られる。したがって、タイプ分けの作業を行うときには、同時に経過という時間的要因を常に考慮する必要がある。

VIII. 不登校児童生徒の今日的傾向と支援

不登校中核群のタイプ(3)と(4)は近年増加傾向にあり、これはそのまま若者のニートやひきこもり問題とつながっている。タイプ(3)と(4)に代表される不登校の今日的傾向とその理解の仕方を以下に示す。

(1) 最近の傾向

① きっかけがはっきりしない

これといったきっかけがなく不登校になっていく子どもたちは、今の社会状況、時代の空気を最も的確に表現しているとも言える。あえて言葉で言うならば、「何となく行きたくない」「学校に行くとても疲れる」「学校のノリについていけない」「すべてが面倒」などの心情を気分として体験し、不登校として体現している。「もうこれ以上頑張れない。もっと気楽にやりたい」という気持ちが膨らみ、学校に行き続けることに失速するのである。これは、言葉では表現できなくても、からだの方が「休みたい」と訴えている状態を意味している。

② 一緒に遊ぶ友人がいる

一般的に神経症的な不登校は、対人恐怖傾向やひきこもり傾向を示す子どもたちが多いが、友人と「部分的」にかかわれる子どもたちは、友人関係に躓いている様相を呈することはない。したがって、周囲の者からすれば、どうして学校に来ることができないのかが、ますますわからないということになりがちである。

③ 学校に来たときには、ごく普通に振舞える

登校前には不安と抵抗が強いが、いったん教室に入ると元気に過ごせる。授業には出られない子も学校だけは来るように誘うと、保健室や相談室に登校できるようになることもある。ただし、今度は保健室や相談室に安住することになり、授業参加へのプレッシャーを与え過ぎたり、保健室や相談室ルールをきびしくすると再び不登校となる。結果的に、保健室登校や相談室登校をすることで、授業への参加は不登校のときよりも難しくなる子もいる。

④ 行事には参加するが、授業には出たがらない

修学旅行や職場体験、その前後の総合的学習の時間、子どもによっては部活には参加できるが、通常の授業の日となると強い抵抗を示す。これを「学校文化」への抵抗として捉えるとわかりやすい。例えば、50分授業を受けて10分休憩の繰り返しという時間の刻み、校内での様々なルール、それを守らせるための先生の立ち居振る舞い、みんなと仲良くすること、頑張ることがいいことだとされる価値観など。これらの価値と枠組みが要求されている状況に、不登校の子どもたちの身体は敏感に反応し、馴染めないことを表現している。学校教師がこのような理解の枠組みを持つことが、本人との心の溝を埋めることに役立つだろう。

⑤ 独自の空想世界を持っている

例えば、絵やアニメの世界、詩作、ホームページを開く、電子メールによるコミュニケーション、ペットを可愛がるなど独自の世界を持っており、その領域では大人顔負けの能力や表現力を発揮する。これらは、その子たち独自の世界とのつながり方であるとして理解し、コミュニケーションを図っていく手段として活用していけるとよい。逆に言えば、子どもたちが創造しようとしている新しい文化に適応できる教師の「文化力」が問われているとも言える。

(2) 「現代型不登校」とは？

これらの傾向は、不登校を自分の問題、すなわち、「悩み」として捉えていく力を乏しくさせる。その葛藤は意識化されにくく、結果的に、自分のやりたいことには参加するがやりたくないことはやらない、しかもそのことにさほど罪悪感を覚えていないという傾向を助長する。「明るい不登校」や自分のやりたくないことはやらない、嫌いな人とはかかわりたくない、人から言われて納得できないことをさせられることを頑なに拒むという「マイペース不登校」などの言葉は、この傾向を捉えたものである。筆者(2003, 2005)は、はっきりした理由があるわけではないが、何となく行きたくないという気分によって行かなくなる不登校を「何となくの不登校」と命名し、近年、この傾向が目立ってきたという印象を持っている。

これらの不登校の背後には、これまで学校が担ってきた「まじめに頑張る文化」や「みんな仲良くすることをよしとする文化」への抵抗が存在する。しかし、見方を変えれば、それは「自分らしく日々を気ままに生きていくことをよしとする新しい文化」を生きる子どもたちの出現を意味している。これらの傾向を持った不登校の子どもたちを、中核群の中の新しい傾向として、不安よりも自己愛を中核に据えた「現代型不登校」と呼ぶことにしたい。

しかし、一見この「気まま」に見える子どもたちの内面には、人に合わせられないという自我の硬さないしは脆弱さが控えており、必ずしも安定した精神状態を保っているわけではない。一見どこまでもマイペースで人の言うことを聞かないのでさぞかし頑固で強い子のような印象を与えることが多いが、このタイプの子に作文を書かせると「自分は強くなりしたい」ということを書いていたりするのはこの不安定さを物語っている。つまり、学校に行かなければいけないのはわかっているが、行きたくない自分に日々負け続けていることの自覚がここにある。したがって、このタイプの子には、周囲に合わせられる経験のバリエーションを少しずつ増やしていくことが当面の目標となる。例えば、修学旅行や楽しい行事にしか参加しない子どもに対して、「それは単なるわがままに過ぎないからそれではいけない」といくら説教してもこのタイプの子はますますそのような関係から遠ざかることにしかならない。「この子はこれしか出られない」という見方を「この子は完全にひきこもらずに、これだけは出て来れる(だからまだよい)」という見方に変え、今できていることを承認のベースとして、少しずつそのレパートリーを増やしていくことに力を注いでいくやり方の方が結果近道となる。

一般的に、これらの傾向を持つ子どもたちに一对一での教育相談や言葉によるカウンセリングを行うのは難しい。まずは感動を共有するかかわりが重要である。言葉によるコミュニケーションではなく、情動を伴うコミュニケーションが信頼関係づくりの第一歩となるだろう。しかし一方で、このタイプの子どもたちの中には高校に入ってから、毎日登校できるようになったり、大学から元気に社会適応し始める子どもたちがかなりみられるという事実もある。あらゆるタイプの子どもたちが集う義務教育の9年間というものは、このタイプの子どもたちにとっては行きづらい場所なのであり、自分で進路や学習形態も選べる高校やさらにクラスもなくなる大学では十分に適応していける可能性を持っているとも考えられる。ということは、学校や社会が子どもたちを一斉に同じ方向に導こうとすることをやめ、子どもたちひとりひとりの特性を認め、そこからの自立を支援していくこと

が、逆にこのタイプの子どもたちが他者と協調しながら自立して生きられる場所を作ってやることにつながるのではないか。

しかし、学校が子どもたちのますます多様化していく姿に対応していくことには自ずと限界がある。むしろ、このような新しい文化を生きる子どもたちにふさわしい新しい居場所や学びの場を、社会の中に多様な形で用意していくことは、今後の教育における重要な課題である。現代日本において、20歳を過ぎた若者のひきこもりが増えているのは、ひきこもりという形で神経を休める他なかった人たちに対して、自分なりのやり方で社会とつながっていくことをよしとしない日本の社会の「硬さ」すなわち「脆さ」であるとも読み取れるのである。

Ⅸ. 保護者への対応

不登校支援において、保護者とほどよい信頼関係を構築していくことは、最も重要な課題のひとつである。不登校に関して、保護者への対応が問題となるのは、多くの場合、母親の協力が得られないときである。しかし、その協力にはコンタクトが取れるかどうかという次元から協力して登校を促す次元まで様々なレベルがあり、とりわけ不登校初期における教師の対応が大きく影響するところである。特に、きっかけとしていじめや教師の指導が絡んでいる場合には、保護者は学校での出来事を子どもから聴取し、その事実を被害的に受けとめ、場合によっては、本人への配慮を学校に要請するという形を取っていることが多い。それにもかかわらず、教師側は、この事情を汲み取ることができず、事務的で型通りの対応を行ったり、学校組織や教師の片面的な見方を大事にしていると受け取られるような対応をしてしまうことがある。その結果、保護者からの初期の要請に対する教師側の誠意ある対応が遅れ、不登校が長期化してしまったケースが現実には数多く存在している。以下は、不登校の子を持つ保護者自身によって語られた苦悩の一部分である。

本人は今のもままでいいと思っているわけではない。何とかしたいと思っています。ただ、何からはじめればいいのか、どうすればいいのかかわからなくて困っているのです。親もはじめは無理やりに学校に行かせようとしてしました。それでもどうしても行こうとはしなかった。そして、親も子ども同様に、どうすればいいのかわからなくなり、親も子ども苦しんでいるのです。あるときは世間体を気にして、あるときは子どもの将来への不安から、子どもを叱ることもありました。そのことが、子どもを追い詰めることになり、ますます子どもが離れていく。そのために、今は子どもに対して腫れ物にさわるようにかかわるようになっていきます…

このような状況にある保護者と本人に、共感をもってかかわってくれる教師が少ないという現状がある。以下は、教師サイドから、訴えが多く対応が難しいと思われる保護者の言葉である。

「100%のことはできませんけど」がはじめにくる先生が多い。親からの圧力に押されて、責任逃れをする。一応、かかわってくれるが、いかにも表面的、事務的で心がこもっていない。私には「やっていますよ」というアリバイ作りのなかかわりに見える。逆に熱意に任せてかかわってくれる先生もいたが、子どもの状況や気持ちを無視して一方的に

学校に来させようとする。その目的は教師の自己満足にあるように感じる。学校の先生の対応は、無理やり来させるか、それがかなわないと放置するかのどちらかになっている。肝心の心を見ようとしていない…

また、別の保護者は次のように話す。

先生は子どもの思いを聞き取ろうとする前に指導してしまう。先生の情熱が子どもを追い詰めることがあるのです。先生は自分のやり方を変えようとしません。それを見て子どもは心を閉ざす。それならまだ、放っておいてくれる先生の方がよいかもしれないと思ってしまう。大切なことは、自分のやり方を子どもの状況に合わせて修正してくれるかどうかなのですが…。

これらの発言は、教師のかかわりの中に、自分の思いをいったん棚上げし、本人や保護者の思いに関心を寄せてくれる姿勢がなければ、学校に行かせようとするいろいろなしてくれるそのことが、かえって本人や保護者を精神的に追い詰め、復帰を遅らせる結果となることを示している。親と子の心情を理解したうえで、柔軟に子どもにかかわってくれる教師になることが、不登校支援の第一歩であることは確かなことである。

X. 校内支援体制の確立

最後に、不登校が発生した段階で、学校全体で教師がどのように連携を取り、対応していけばよいか、その手順の一例をマニュアル化してみたものが以下の①から⑥である。

- ① 欠席が3日以上続いている児童生徒のことを担任が学年会等で報告する。
- ② 学級担任が生徒から聞いた情報を学年会で共有し、各教師が持っている情報を出し合いながら登校しぶりのきっかけ、背景、現在の状況について協議する。できれば、当面の対応策まで協議する。
- ③ ②における情報をもとに、関係教師（校長、生徒指導主任、教育相談担当、養護教諭、スクールカウンセラー等）によるケース検討会を開き、生徒理解と今後の対応について話し合う。その際、キーパーソンとなる教師についても確認する。
- ④ キーパーソンとなる教師が、家庭訪問等を行い、「何か理由やきっかけはないか?」「家ではどんなふうに過ごしているか?」「どうしたいと考えているのか?」などを聞き出し、学校でできることを検討する。保護者にはスクールカウンセラーへの相談を勧めてみる。（学級担任以外の教師がキーパーソンの場合は、担任は、キーパーソンから情報を聞き、必要に応じて、本人や保護者と面談する。）
- ⑤ 関係教師は、本人や保護者との面談を通して得られた情報をもとに、学校としてどのように対応していくかを検討し、見通しを確認する。
- ⑥ 職員会で全教師に対処方針について確認し、全教師がそれぞれの立場で行えることを考えてかかわってもらう。

以上のような校内支援体制、すなわち、システムづくりの目的は、不登校が発生したときの連携の形と流れをあらかじめ学校内に定着させておくことで、対応の遅れやクラスでの抱え込みを防止することである。しかし、体制やシステムが柔軟に機能していくためには、その前に人が立っていなければならない。連携や協働と呼ばれる情報伝達が、子ども

の視点に立った人から人への伝達となることが最も重要なことである。現在、学校外にも数多くの支援機関が存在するようになっているが、連携の名のもとに肝心の子どもが取り残されているケースが増えている。その意味でも、子どもの成長へのニーズと大人たちが提供しようとしている支援との間にズレがないかどうかを常に問い直しつつ、子どもにかかわっていくことが、今後の学校教師に求められている姿勢であると言えるだろう。

<文献>

- 小泉英二 (1988) 教育相談の立場からみた不登校の問題. 児童青年精神医学とその近接領域 29 (6) ; 359-366.
- 増井武士 (2002) 不登校児から見た世界. 有斐閣選書.
- 三浦 展 (2005) 下流社会 新たな階層集団の出現. 光文社新書.
- 文部科学省 (2002) 不登校問題に関する調査協力者会議報告書.
- 大石英史 (2003) 不登校の今日的傾向とその課題. 山口大学教育学部研究論叢 第53巻第3部.
- 大石英史 (2005) 不登校の今日的傾向と「初発対応」の重要性. 山口大学教育学部研究論叢 第54巻第3部.
- 奥地圭子 (2005) 不登校という生き方. NHKブックス.
- 砂川真澄編集・竹川郁雄監修 (2005) 解決しよう!! 子どものいじめ. 子どもの人権・安全ステーション.